

腐り切った組織の実態を継続してウォッチする 第七十五弾

神社本庁再生への道—その三十八

腐敗の極地にある日本の政治と宗教

—神道人は今こそ神社本庁設立の原点を思い起こし、現実を直視して行動せよ

藤原登 (フリーライター)

今、政治の世界と宗教の世界が、共に混乱の極みにある。言うまでもなく前者は、政権与党である自民党の裏金問題であり、後者は、戦後日本の伝統宗教界の一翼を担ってきた神社本庁をめぐる、田中「なほ在任」総長の居座り問題である。自民党にとっても、神社本庁にとっても、団体創設以来の大スキャンダルである。

状況が続いているのだ。

本連載を最初から読まれてきた方は気づいていると拝察するが、これら政治と宗教の世界で起きた金銭疑惑には、意外な接点がある。本号ではそこをなぞりながら、現代日本を覆う暗雲の正体を暴いてゆくこととした。

「神の国」から関係は深まる

先に問題化したのは、平成十八年に職舎売却疑惑が発覚した神社本庁だ。疑惑を内部告発した職員に対する不当な懲戒処分をめぐり、地位保全裁判が起きた。一昨年、神社本庁は全面敗訴したが、田中総長以下の過半数の役員は、新しい執行部によって問題が総括され、信用が回復されることを願う。この指示を一切意に介さず、その後田中氏が代表役員の地位に居座り続けるという前代未聞の

その接点とは、何と言っても、裏金スキヤンドルの主役である自民党安倍派(清和会・令和六年二月解散)と、神社本庁の疑惑の黒幕である神道政治連盟の打田文博会長との間に、ただならぬ関係が見え隠れすることである。

安倍派の裏金スキームは森喜朗会長の時代から言われているが、森氏の会長就任は平成十

盟と神道連国会議員懇談会の設立三十周年を記念する祝賀会が開催されたが、この席で森総理による「神の国」発言が飛び出した。

森氏の失言は数知れないが、何れも軽いものばかりだ。「日本は天皇を中心とする神の国」との発言に、一般のメディアは政教分離違反だと大騒ぎしたが、サービスピ精神旺盛の森氏が、神社関係者を前に、聴衆の喜ぶ話をしたまう。大抵、金権体質の森氏が、本気でそう考

年暮である。そして十二年四月、在任中に脳梗塞で倒れた小淵首相を引き継ぐ形で、総理の座についた。このとき、青木幹雄官房長官の他、森喜朗幹事長、村上正邦参議院議員会長、野中広務幹事長代理、亀井静香政調会長の五人組と言われた党幹部の密談で、森氏を後継総裁に擁立したのであるが、これを決定づけたのが、「参議院のドン」と云われた村上氏の「あんた(森氏)がやればいいじゃないか」の一言であったとされる。後に、この発言を失敗だったと悔やんだ村上氏は、平成十年の参議院選挙比例区における神道政治連盟推薦候補であり、同連盟国会議員懇談会の幹事長であった。神道連と政界とのパイプ役をとめていたのだ。

神の国発言当時、打田氏は神道政治連盟の事務局長であったが、一ヶ月後に退職し、静岡県にある小国神社の宮司に就任した。そして前述の通り、この年の秋にKSD事件が発覚する。そして翌年、村上議員と元秘書の小山孝雄参議院議員の二人が連捕され、議員辞職するが、当時の神道連は参議院選挙を間近に控え、村上氏に続き小山氏を比例区の推薦候補として支援していたことから、組織的な大打撃を受けることとなった。

打田氏は財団移転で暗躍

神道連を一旦離れ、運よくKSD事件を巡る騒動から逃れた打田氏は、事前に何らかの予兆を嗅ぎとっていたのか、そこは謎であるが、実はこの時、打田氏には神道連よりも大切な役回りがあったのである。それが、現在の日本文化興隆財団の前身である国民精神研修財団が事務所を移転するにあたり、盟友の高橋恒雄氏が社長を務める不動産会社の(株)ディンブル・インターナショナルを介在させ、多額の利益を得させることであった。

実際にこの移転に際して、自己資金のない同社は、指定暴力団と関係のある人物から、年利一割五分で四億円を借入をして、平成十二年五月に財団新施設を購入し、財団に売却したのであった。そして、この移転事業を表で取り切ったのが、当時、神社本庁の財政部長であり、現在、宇佐神宮の宮司を務めている小野崇之氏であり、それを裏からお膳立てし、小野氏に指示していたのが、神道連及び神社本庁を退職して後も、当時の工藤総長から役員特別補佐とい

う役目を与えられ、引き続き権勢を誇っていた打田氏である。これらの経緯は、同じく(株)ディンブル社が関与した百合丘職舎売却をめぐる職員の地位保全裁判において明らかにされている。田中「打田体制側が、しかも森氏が後を託していた五人衆の時代に解散を余儀なくされた。

政治も宗教も、ともにこの上なく大切なものである。しかし、この二つが同時に目的を忘れ墮落したら、世の中に平安は永遠に訪れない。

民主党政権下を除き政権与党の地位にあった自民党と、神道政治連盟を通して政権与党への影響力を強めようとしてきた神社本庁は、ともに今、危機的状況に立ち至っている。しかし、責任ある地位にある人たちは、ともに事実を隠蔽し、問題をすり替えて、社会を欺き続けている。

国民からの厳しい裁きを受けるのは、いずれが先であろうか。神のみぞ知るなどと言っている場合ではない。

藤原 登 (ふじわらのぼん)

昭和二十八年、東京に生まれる。広告代理店勤務の傍ら、歴史、宗教、哲学を学ぶ。現在は同人誌を中心に寄稿している。